

---

アンオーダブル

米内山陽子

---

登場人物

国府田佐和(こうださわ)	劇作家	三〇〜四五歳
浦川亨(うらかわ とおる)	演出家	三〇〜四五歳、五〇歳
国府田湊(こうだ みなと)	佐和の夫、円の父	三五〜五〇歳、五五歳
浦川栄恵(うらかわ さかえ)	亨の妻、湊の後輩	二九〜四四歳、四九歳
国府田円(こうだ まどか)	大学生	佐和の娘 〇〜十五歳、二〇歳



佐和が赤ん坊を抱いている。

その前に亨が座っている。

居間で打ち合わせしているようだ。

佐和　じゃあ、もうここで主役が死ぬってというのは？

亨　それじゃ筋が通らない。

佐和　だってもうこの人死ぬ覚悟しちゃってんだよ

亨　ここで死んだらこの後どうすんの

佐和　考えてないけど

亨　まだ一〇ページじゃん。ここで死なせちゃダメじゃん。

佐和　だって、もう死ぬ流れなんだもん

亨　主役だろ

佐和　死んだら主役じゃなくなるの

亨　どうやって出すんだよ

佐和    なんか……回想とか、夢枕に立つとか、守護霊になるとか

亨    適当に喋ってんじゃねーよ

赤ん坊泣き出す。

佐和    あー、ごめん、乳やっていい？

亨    ……どうぞ。

佐和    わりーね（佐和、授乳ケープをまとい、授乳する）。

亨    目のやり場に困るな

佐和    慣れて。……いつそさあ、主役死んだところから始まるのどうかな

亨    プロットから離れすぎだろ

佐和    もーやだ。なんであんなプロット出しちゃったんだろうか

亨    納得してたじゃねーか

佐和    痛った！（授乳ケープの中に）円くパイパイ噛まないで。

亨    （メモを見て唸る）イチからやり直すか……？

佐和    プロットやり直すのやだなあ。

亨    そういうレベルの話だと思うけど

佐和　プロット嫌いなんだよなあ。

亨　死んでからスタートか

佐和　死んでから

亨　死んでから

二十歳の円がいる。

円　当たり前みたいに中央線が遅れていました。高円寺のホームは平日の午後なのに人口密度が高くなつてて、ようやく到着したすし詰めのおレンジの電車で体をねじ込みました。二駅で乗り換えればいいんだ。少しの我慢だ。吊革が掴めなくて、足の置き場もよくわからなくて、握ってたスマホも上げられない。目の前には細い髪質のロングヘアからアホ毛がピンピンはねてて、嗅ぎたくもない他人の髪のおいを嗅ぐ羽目になりました。あーもうやだ。新宿で引き返そうかな。二十歳のお祝いにお祖母ちゃんにくれた商品券があるし、ルミネか思い切って伊勢丹に行って財布を買おうかな。ケイトスペード買えるかな。赤いのがいいけど、財布に赤は良くないってお祖母ちゃんが言った。新宿に着くとどんだけ乗ってたんだよ、ってくらい人が降りて、わたしもその人波に流されて南口へ昇るエスカレーターに乗りました。一瞬本当に伊勢丹に行ってしまうかと思ったけど、昨日の夜にしたお父さんとのケンカを思い出して、自分を鼓舞して、山手線内回りに乗り込みました。よかった。山手線は遅れてない。この先は

余り行き慣れてないから、経路案内を見直します。馬込までは五反田乗り換え。五反田あ？降りたことないし。五反田から浅草線。浅草線、赤寄りのピンク。馬込で降りて地上に出たら環七がすぐ通って、バカかよ、環七真っ直ぐ下ってきたかったわ、とか思っ、その人の家までの道のりを確認しました。徒歩十二分。ってことは十五分かかる。歩くのは嫌いです。右、左、右、左、って機械的に踏み出す度に、嫌な思い出が頭をよぎるから。音楽のボリュームを上げました。出来るだけ軽薄で、エモいやつ。

円は音楽に合わせて歩く。

円 母が五年前に死にました。わたしは十五でした。母は演劇をやっていた人でした。父は会社員です。母が死んでから、父は一人で、わたしを私立大学まで行かせてくれました。優しい優しい父が唯一禁じたことは、わたしが演劇に関わることでした。

円の足は止まる。

円 五階建てのマンションの前にたどり着きました。オートロックのインターフォンを押します。3, 0, 2。

チャイム音。

円  
手が少し、震えていました。ここには、母のもう一人のパートナーだった人が、住んでいます。

自動ドアの開く音。

亨 佐和の話を聞きに来たんだよね？

円 はい。突然すみません。

亨 大丈夫。休みだったし。

円 お忙しいんですか？

亨 まあ芝居なんてのはね、波があるから。始まったら忙しいし、終わったら暇だよ。で、今は終わってばかり。

円 何やってたんですか？

亨 アニメとか見る？

円 最近はあるまり

亨 じゃあわかんないかな。

円 すいません。

亨 いや……

亨 佐和の葬式以来かな

円 そうですね。お父さんとケンカしてるのを見ました

亨 見てたんだ。ごめんね。

円 いえ。

亨 あれは俺が完全に悪かった

円 あの時の、あの紙、なんだったんですか？

亨 紙。

葬式の回想

雨の音

栄恵 湊さん

湊 栄恵ちゃん。

栄恵 遅くにごめんなさい

湊 ああ……

亨 ご無沙汰しています

湊 うん。

栄恵 今日初日で、どうしても抜けられなくてこんな時間に。

湊 焼香して行ってやって。佐和も喜ぶ。

栄恵 うん。

亨 (紙を差し出し) あの、これ、佐和のお棺と一緒にに入れていただけませんか。

栄恵 亨？

湊 それは、ダメでしょ

亨 お願いします。一緒に入れていただいただけでいいんです。

湊 無理だよ。

亨 ただの紙切れだって思ってくればいいんです。

湊 ちよつと、ダメだって言ってるじゃない

栄恵 ごめんなさい！ 亨、やめよう

亨 どうしてですか。確かに佐和はあなたの妻でした。でも、劇作家でもあったんです。

栄恵 亨！

湊 そんなことわかってるよ

亨 劇作家としても、送らせてください

湊 だから、なんであんたが言うんだよ

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

## アンオーダブル（おためしサンプル）

---

2020年8月3日 初版発行

著 者 米内山陽子 © 2020年

発行者 石村寛之

発行所 有限会社レトロインク

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7

電話 0422-24-9529

---